西寺跡発掘調査概要

建造物研究室・建築
歴史研究室・考古

一

桓武天皇が平安京を造成された時に、九条大路に接し、朱雀大路を中にして東西の二寺を造立され、のち東寺が弘法大師に付せられ、真言宗の中で重きをなし、今に至るも法燈を伝えていることはいまさらいうに及ばない。それに対し、西寺は、東寺と同規模で築造され、金堂講堂を中心にして、南大門・中門・回廊・塔等が造成され、三面僧房もあり、また食堂もあつたかと思われているけれど、東寺に較べて、すべて早く廃滅に帰し、わずかに地名として「こんどう」と呼ばれている土壇があり、その位置は東寺では講堂にあたる跡で、近年にいたるまで知られていた西寺の唯一の遺跡であつた。(註1)

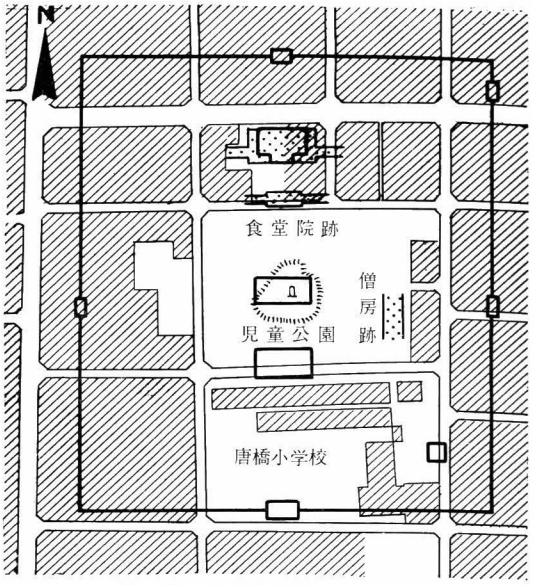
ところでこのあたりが京都市に編入され、市区が定められ道路がつけられた時、昭和8年に講堂の北、東寄りに寺跡の一部を占めて祀られている鎌達稲荷社の北方で、南北12尺3寸の間隔をおいて礎石2個が発見された。当時はこれを伽藍の南北中心線に近く東寺西門通り(九条坊門)に近いので、おそらくは北門跡であろうかと推定された。(註2)それよりさき、大正10年3月3日に講堂跡を含むあたり一帯が史蹟に指定され、この地域が児童公園になり、その南に唐橋小学校(もとは七条第二小学校と呼んだ)が建設された。学校の北校舎造成の時に緑釉瓦が多数に発見され、軒丸・軒平瓦の完形に近いものは学校に保存、京都国立博物館に寄託された。おそらくは金堂跡のものかと思われる。

ところが昭和35年夏、児童公園の東部に防火貯水槽をかねたプール建設の計画があり、その位置を史蹟指定地域外にとるようにと指示された。プール建設工事中、南北一線上に径80cmをこえる礎石が2個発見されたので、工事を一時停止し、その礎石を含む遺跡の調査を京都府教育庁文化財保護課は当研究所に委嘱した。研究所は「平安時代の仏教建築」をテーマに研究している杉山技官を発掘責任者として建築・考古両室員で、同年6月18日から8日間にわたり調査を行い、後述のようにその遺跡が東僧房の一部であることをあきらかにした。

昭和36年9月、児童公園北の、伽藍中心線に近い民有地でまだ畑のまゝである所に礎石のあることが浄土宗西寺住職朱雀専竜氏によつて注意され、唐橋小学校長城金治郎氏を通じて、当研究所に連絡されて来たので、杉山技官はそれを調査、文化財保護課に報告した。同課ではその地点を調査する企劃をたて、再び、これを当研究所に委嘱し、研究所は前回と同様杉山技官の研究としたが、発掘期間が平城宮第8次調査と重なつたため、専ら同技官が事に当つた。調査は昭和37年2月19日から22日間にわたり、食堂とその前(南)にある八脚門・廊の

夫々の一部を発掘して、その地点が食堂院であることを明らかにしたのである。

これらの結果、西寺については二、三年の間に、未調査の講堂跡を中心にして東には東僧房、北には食堂院のあることを明かにしてその知見をひろめるに至つた。



第1図　西寺周辺図（太線は東寺）

二

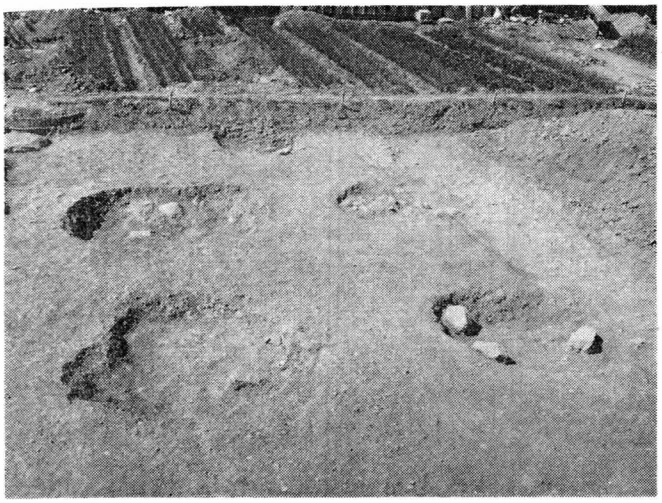
東僧房の桁行総長を限定するまではいたらなかつたが、一間は12.5尺（この営造尺は現尺に近い）で、梁間は11＋14＋11尺とかぞえられ、梁間には礎石が4列あつたことになる。そのうち西より第1列は花崗岩で、径80cmの円形刳出しの上、中心に径15cmの円形枘を造り出したもので、プールの地均しに発見された礎石というのはこれに当る。現状は一方に傾けてあつた。おそらくは耕地であつた時、耕作に邪魔になるので、一方を掘り低めたものと思われる。第2列（入側柱）の礎石は方約60cmの凝灰岩から成るもので、表面は削りとられてよくわからず、漸く底に近い部分、もしくは抜き取られた時、こわされて底土に痕跡をのこしている程度で現われた。第3・4列目のものは、第1列のもの程大きくはなかつたようであるが花崗岩で作られたものが抜き取られた状態であらわれた。もつともプール範囲内では南の斜半分がすぐ砂利層であらわれ、また、児童公園としての施設で攪乱されこわされていたので、実際はよくわからなかつたから、一通りおいた北側で、上述のことをたしかめておいた。

第2図　西寺東僧房

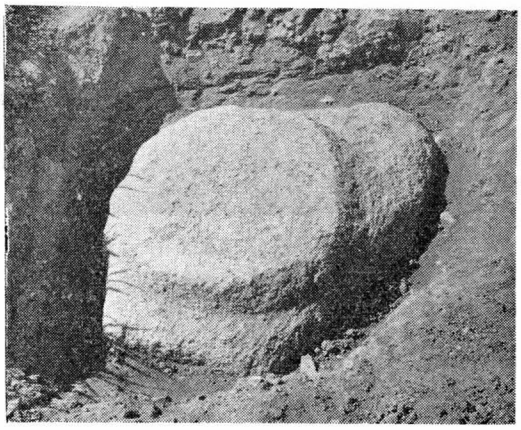
それと共に、この建物の基壇がどのように作られたものかを知るために、西辺で断面をとつたが、たしかに仕事と思われるものは出なかつたので、極めて低いものが削られて跡すら残していないと予想した。この遺跡では礎石に花崗岩と凝灰岩とが混用してある点に注意すべきものがあると思うが、その理由は、この発掘だけではわからない。

三

食堂院のうち、南門とそれにとりつく廊は、西半の一部があらわれたのみで、全容は民家もしくは道路に阻まれたため発掘は不可能であつた。それにせよ、門は中央間14尺、端の間10.6尺、梁間は二間でそれぞれ10.6尺であると推定出来た。この門の桁行中心線が伽藍の中心線と一致していると考えられ、こゝに伽藍の中心線を得る一つの端緒を得たということは今さら改めていう必要はなかろう。この間の梁間中心柱を中にはさんで、単廊梁間12.5尺のものがとりついていて、桁行にはそれぞれ一間が10.6尺であることがわかつた。昭和36年9月に見た礎石というのは、この単廊の南列の2個であつて、掘り出した礎石のうち、完形品は円形の刳り出しのあつたものがあり、これには据えられたまゝのものが見られ、全く動いていない様子にあつたので、基壇上面はのこつていたのであるが、その縁の砌となるものはなく、雨落ちにあたる部分、柱真より約2mの所、巾80cm位に礫のばらまかれたような状態であらわれた。この石敷は門と廊の出入に沿うているので、門にも砌とするようなものはなかつた。門の礎石は全部抜きとられていて、花崗岩の破片をのこしていたが、その形態はよくわからない。また、廊が東や西で折れ曲る地点がどこであるか、それらしい所は民家の下になつているので不明だが、鎌達稲荷の北の道、西北角の本多氏邸の座敷床下にも現存しているのでそこまでつづいていることは明らかで、それは



第3図　食堂南門および回廊

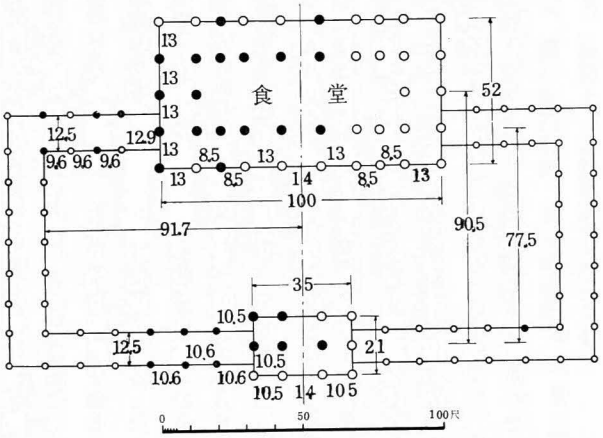


第4図　回　廊　礎　石

第5図 食　堂　全　景

おそらく門より第5列目にあたるものと思う。

食堂は発見した礎石抜き取り穴と、門に基いて知られる伽藍中心線に対する関係より、桁行は九間（13＋8.5＋8.5＋13＋14＋13＋8.5＋8.5＋13＝100尺）であること、梁間は四間（13＋13＋13＋13＝52尺）であるという特異な平面を示した。これは東寺食堂が「東宝記」や寛永12年の東寺伽藍図に見られるものと異り、さらに今のものとも異つている。この遺跡では礎石抜取り穴の底が、現在の地表よりわずか20―30cmであらわれることからすれば、礎石の厚さが50―60cm位と考えられるからその分だけは削平されてしまつたものであろう。その基壇周辺は柱真より約3.2mあたりのところで瓦片が散乱しているため、それは基壇より外のものであることを示していると考えたが、基壇そのものが何でつくられたかその形式を知ることが出来なかつた。たゞし前面では瓦片はなく、柱真より約3mの所で巾約3mにわたり、凝灰岩の断片や屑が散乱した様子で現われたので、前面にはそ



第6図　西寺食堂院復原図

の材料による階段が作られていたものと想像した。

前面の回廊は、中庭をつくり、食堂の入側柱をはさんで軒廊としてとりついていた。たゞし西の基壇際では、その痕跡が明確でなく、その南列の位置には井戸が存在していた。ところで、鎌達稲荷の北の道で発見されたという2個の礎石はこの東軒廊のものになると考えられるが、その位置を示す絶対数値がとられていないのでよくわからない。

発見された井戸の全体の深さは現在地表より約2.3mあり上方に軒瓦や塼を用い川石の乱石積で石・瓦片で埋めてあつた。底に近い土には鎌倉時代のものと推定出来る土師質の皿が多数発見され、表土に近い所では室町時代のものがあつた。従ってこの井戸の位置が食堂と軒廊とが接する地点であるのと、造立時の塼や軒平瓦が転用されていることから、寺の創立当初からあるのではなく、寺が廃滅したのち、畑となつた時、灌漑用水のために野井戸として掘られたもので、室町時代末には埋められていたと思われる。

遺物として、井戸から出たものを別にすれば、瓦が多数で、その他土器には完形品はなく破片のみであつたが、土師質・須恵質のもの、それから緑釉のかかつたものもあつた。瓦のうち緑釉瓦の破片は東僧房跡では食堂院跡より多く、後者ではわずか2片のみであつた。軒先瓦のうち丸瓦は通じて蓮花文8種14個、平瓦は有心唐草文5種であつて、24個であつた。すべて平安時代初期に属するものである。

四

講堂跡そのものは発掘していないが、その周辺の東僧房と食堂院とが出たことは、東寺西寺が同規模であつたとすれば、東寺では現在いまだわからないことを知つたので、それのみでも十分意義があるわけであるが、特に食堂院の南門がみつかり、その門は性質上、三間一戸の八脚門であるだろうから、今回の発掘で、その中心線が出たことになり、それによつて食堂の中心線を示し、前述の通り規模を知ることが出来た。また、その線を以て当然伽藍の南北中心線を発見したことになる。しかし、それだけでは極めて狭い関係で出た数値であるから、もし東僧房に対する西僧房を発見することが出来、同種の規模で柱列が出るなら、東西僧房の間隔をはかることにより、さらに詳しい数値を得ることになる。幸い、西僧房の一部はまだ畑地のまゝである所もあるから時機を得て発掘するならば、その数値が得られるわけである。その数値による伽藍南北中心線と東寺のそれとの間の距離をはかるならば、今までに確実に知り得なかつた平安京の造営時に使われた単位尺を知ることが出来る。(註3) このことは極めて重大なことであつて、単に平安京の規模を知るだけではなく、これと比較して、平城京のそれにも重要な資料を提供する。

(杉山信三)

註

(1) 梅原末治「西寺址」(「京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書」第2冊)。福山敏男「初期天台真言寺院の建築」(「仏教考古学講座」第3巻)

(2) 川勝政太郎「西寺の礎石」(「史迹と美術」33号、昭和8年8月)

(3) 福山敏男「六勝寺の位置について」(上)(「美術史学」昭和18年9月号)に於いて1万分之1の地図によると前提され、平安京計画尺と現曲尺とは大体一致すると述べられ、1尺に対し0.996という値を出しておられる。